

これからも復興を応援し続けたい 佐藤浩史(教育総務課)



私は釜石市教育委員会へ3カ月派遣され学校施設の維持管理や営繕工事の設計・監理業務を担当させて頂きました。釜石市は震災により小中学校を合わせ4校の校舎が破壊され、現在も子どもたちは応急仮設校舎で学習しています。仮設校舎は構造が簡易で耐久性や機能が劣るため、湿気で床が破損するなど学習環境に支障が出ていました。新しい校舎の建設が急がれますが、現在設計中であと2年半かかるとのことでした。

市街地では真新しいお店が建ち並び始め、「イオンタウン釜石」新築工事が平成26年3月のオープンに向け急ピッチで進められていました。大型商業施設の完成には雇用を始め大きな経済波及効果が期待されています。その一方で沿岸部には一面に荒野のような景色が広がる地区があり、被災者の住宅再建はまだこれからでした。

復興への障害の一つとして工事の入札不調が約9割という状況がありました。これは長く続いた不況の影響で建設業界の規模が縮小してきたのに対し、大変多くの工事が一気に発注され施工業者や技術者、職人が圧倒的に不足していることや建設資材の不足による価格高騰が原因ですが、官庁工事離れについても考えなければならぬと感じました。

思うように進まない復興への苛立ちやストレスを釜石市の皆さんが一番感じてみえると思いますが、震災の悲惨な体験から一步一步乗り越えて「屈せず・撓まぬ心」の精神で常に前向きに努力を続けてみえる姿や私たち派遣職員へのお気遣いにとても感銘を受けました。派遣期間はあっという間に終わりましたが、これからも東北や釜石市の復興のために貢献できることを考え応援し続けたいと思います。



尾崎公園(避難所)から釜石港を望む



シープラザ遊(イベント広場)前

釜石への派遣を終えて 柴田雅子(高齢福祉課)



昨年7月31日から8月31日までの約1カ月、岩手県釜石市へ被災地支援に行っていました。仮設住宅入居者は居室に閉じこもりがちになってしまうため、仮設住宅の談話室で健康相談を行い、健康講話や簡単な運動を実施しました。また継続支援が必要な人への家庭訪問も行ってきました。

釜石では震災から2年半が過ぎても、つらい現実と向き合っている人々の話を聞くことができました。被災者の皆さんのお話はどれも重く悲しいものですが、なかでも2歳児健診の際に聞いた話が頭から離れません。お母さんは当時2歳の長子と乳児を連れて避難した防災センターで津波に襲われ、天井まで浸水し鼻まで水に浸った状態で立ち泳ぎしながら2人の子どもを抱いていたのですが、乳児に呼吸をさせるために長子の手を放してしまい、流されていく長子を助けられなかったそうです。ご遺体はまだ見つかっていないとのこと。「流された子と同じ年齢になり、見ていると時々つらい」というお母さんのお話に言葉を掛けることができませんでした。

ただ、どなたも派遣職員への気遣いをしてくださり、「こんな遠いところまで来てくれてありがとう」など、温かい言葉を掛けてくださいました。

この派遣を通じ、平時からの人のつながりが、本当に大切だということを学んできましたので、日々の仕事へも生かしていきたいと思っています。釜石市だけでなく、震災により被害を受けた地域はまだ復興半ばです。被災地の情報に気にかけて知っていただくことも支援につながります。この広報の記事を目にとめて読んでいただいた皆さま、本当にありがとうございます。



頭と手先を使う体操として「あやとり」



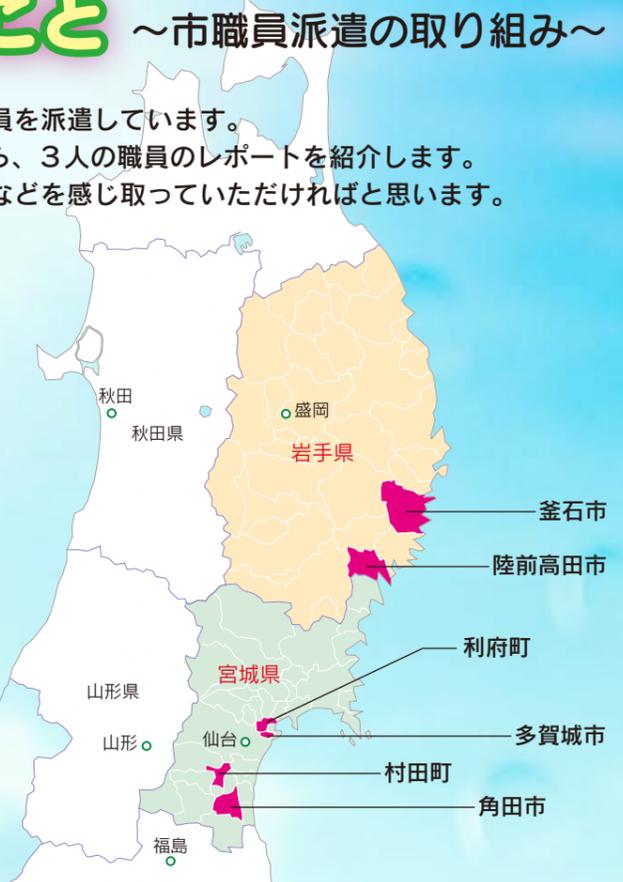
仮設住宅の談話室での健康相談

復興のためにできること ～市職員派遣の取り組み～

市は、東日本大震災の復興支援のため、被災地に職員を派遣しています。今回は、これまでに派遣された26人の職員の中から、3人の職員のレポートを紹介し、被災地の復興状況や課題、そこで暮らす人々の思いなどを感じ取っていただければと思います。

東日本大震災に対する取り組み状況(職員派遣分のみ)

平成23年	3月11日(金)	東北地方太平洋沖地震発生
3月	2人(水道課)	(宮城県村田町)
4月	2人(水道課)	(宮城県角田市、利府町)
5月	1人(保健師)	(岩手県陸前高田市)
6月	1人(保健師)	(岩手県陸前高田市)
6～8月	1人(保健師)	(岩手県釜石市)
10～12月	2人(保健師、技術職員)	(岩手県釜石市)
平成24年		
4～9月	2人(技術職員)	(宮城県多賀城市)
4～6月	1人(保健師)	(岩手県釜石市)
9～12月	1人(技術職員)	(岩手県釜石市)
10～3月	2人(技術職員)	(宮城県多賀城市)
10～12月	1人(保健師)	(岩手県釜石市)
平成25年		
4～9月	1人(技術職員)	(宮城県多賀城市)
7～8月	1人(保健師)	(岩手県釜石市)
9～12月	1人(技術職員)	(岩手県釜石市)



それでもこの地で生きていく 日比野聡(水道課)



震災から2年目を迎えた昨年3月、多賀城市への半年間の派遣要請を受けました。一昨年、気仙沼市と陸前高田市を訪れ、壮絶な被災地を目の当たりにし、機会があれば復興のお手伝いをしたいと考えていたため即答で了解しました。担当業務は、地震によって浮き上がったマンホールや破断した下水道管の復旧ならびに雨水浸水対策の設計業務でした。

まちに対する第一印象は予想とは違い、震災の爪跡を市内で目にするのはほとんどありませんでした。しかし、多賀城市職員からの話や被災直後の写真や画像を拝見すると、その思いは打ち消されました。津波によって市内の三分の一が浸水し180人を超える尊い命が奪われており、決して被害が少なかった訳ではありませんでした。市長を先頭に全市一丸となって早期復興に取り組み、中でも、震災瓦礫の処理をいち早く進めたことによる成果と言えるでしょう。

派遣期間中、週末を利用して被害を受けた沿岸部を中心に東北各地を訪問しました。そこでお会いした被災者からは、決して諦めることなく、「それでもこの地で生きていく」という力強い言葉を聞かせていただきました。励ますどころか、逆に、たくましく復興に取り組む人々から、困難に立ち向かう勇気をもらいました。

震災から2年、そしてこれからの復興にかかる年月を考えるとわずか半年という短い期間でしたが、多賀城市職員や派遣職員の皆さまの心添えで無事終えることができましたことに感謝申し上げます。また今回、こうした機会を与えていただいた職場をはじめ関係者の皆さま、そして半年間の単身赴任を許してくれた家族に感謝して私の派遣報告とさせていただきます。



被災直後の様子(工場敷地内)



被災直後の様子(公共ます)